

いつの日か生命結ばん

(昭和四十一年寮歌)

須藤洋一君 作歌
吉川正文君 作曲

序

重畳たる手稲藻岩の山脈を吾が宿舎の青垣となし
鬱乎たる原始の叢林を吾が逍遙の小径となす。

吾が寮友よ草原に出でよ、暗き孤城より出でんかな。

深遠き蒼穹あまりに青く、輝く雪原あまりに白し。

さればよしその身は平々凡々ならんとも、吾等が野望尽くるを知らず。

静寂を破る蛩声に、吹雪鎮むる高吟に 青春の意気託しなん

一

いつの日か生命結ばん

碧空高き楡よポプラよ

黄金なす銀杏並木よ

枯れ枯れと曠野に朔風吹けば

荒涼の憂愁よぎりぬ

三

鶏はまだ長鳴かずして

貪れる熟睡をあとに

仄暗き叢林に佇立てば

今いずこ青き野望は

消え行くや先人の遺声

五

睡み来て親友は高唱えど

舌苦き地酒に酔い痴れ

ストームに身は狂乱うとも

忘れ得じ果てなき旅路

この惆悵誰に語らん

二

島松の雪の路上に

手を振りし遠き日の夢

去り行きぬ偉大なる巨影

君聞くや馬上の声を

広ごれる石狩の原野に

四

蝦夷人よ今こそ瞑想え

星辰しるき彼の冬空に

天翔ける天馬の行方

吹雪き荒ぶ北風をつぶてを

若駒の鞭とはなさん

六

暖かき光求めて

彷徨えり冷たき野末

北国に春来りなば

若き日の稚き愁思は

雪の如融けて流れん